

郷里の先達佐藤鶴谷翁の一冊のおかげで、両先生の交友の中に割りこんだ私は幸運であった。

両先生から受けた学恩とご慈愛は、終生忘れることは出来ない。今となつては唯々ご冥福を祈るのみである。

### 会員の著書紹介

## 巴の鏡 天文―天正編 御手洗一而著

まず、大分合同新聞の書評を紹介することにしよう。

「御手洗一族物語」と副題にあるように、南海部郡に本拠を構えた御手洗氏の歴史を綴った大河小説。著者は佐伯市出身で川越在住。

御手洗一族はもと伊予国大三島領の御手洗島に住んでいたが、応永二十二年（一四一五）安芸の小早川勢に追われ、一族四十一人は船で瀬戸内海をさまよった末、豊後佐伯荘の米水津湾に無断侵入、ここを安住の地として佐伯氏に仕えた。このいきさつは「応永―明応編」に描かれ、つづく「明応―天文編」で佐伯惟治とその滅亡の歴史がたどられた。

この編では大友二階崩れの変から始まり、宗麟と佐伯惟教との関係を中心に描かれる。青年時代の宗麟は国衆を毛嫌いし、大神出の佐伯氏は伊予へ亡命しなげればならず、御手洗一族もその余波をこうむった。

御手洗一族を通じてとらえられた大友宗麟が興味深い。と評されている。

私は、この本を四百年間佐伯地方を統治した佐伯氏の歴史書として興味深く読んでいる。主家大友氏に殉じて伊予に去った佐伯氏を語る本は「柵牟礼物語」があるがこの本だけでは物足りない。「巴の鏡」はよい佐伯氏の歴史書でもある。

会員のご一読をおすすめする。

定価二千二百円、史談会で取次ぎます。史談会員には特典あり。著者署名入り本は残部六冊限り、特別に署名してもらったもの。  
(塩月 記)